

2018年度第1学期 One Asia 財団国際講座

「アジア共同体：中世の東アジア交流と博多」

第13回 One Asia 財団国際講座は、徐興慶学長の招聘を受け「アジア共同体：中世の東アジア交流と博多」と題し、日本の九州大学大学院人文科学研究教授兼院長である佐伯弘次氏が講演しました。講演終了後、佐伯教授は張鏡湖理事長を表敬訪問し種々歓談しました。

佐伯弘次教授は日本中世史研究の著名な学者であり、その代表的な著作として、「日本の中世9. モンゴル襲来の衝撃」（中央公論社、2003年）、「対馬と海峡の中世史」（山川出版社、2008年）、「朝鮮前期の韓日関係と博多・対馬」（景仁文化社、2010年）等があります。本講座で佐伯教授は、その長期にわたる研究の学術的成果を踏まえて、「中世の東アジア交流と博多」と題して解説しました。

中世の東アジア（11～16世紀）の世界は、中国、朝鮮半島、日本、そして琉球で等構成されています。地理的要因により、日本は東アジアの世界でも独特な場所となっており、中国（宋・元・明）、朝鮮半島（高麗・朝鮮）、琉球との長期的な交流において、博多は日本の代表的な貿易港となりました。中世の博多の都市発展は、鴻臚館（こうろかん）時代（7～11世紀）、日宋貿易（11～13世紀）、蒙古襲来（1274年・1281年）、日元貿易（13～14世紀）の時代にさかのぼります。日明・日朝・日琉貿易（14～16世紀）を経て自治都市が形成されました。今回佐伯教授は、15世紀の日本と明、朝鮮、琉球との関係に焦点を当て、博多と博多の商人の果たす役割を探り、考古学の成果を取り入れながら考証しています。

以下は講義の要約です。

15世紀の室町時代はどんな時代か？室町時代は、第三代将軍足利義満（1358～1408年）の政治の全盛期で、経済と産業の発展、東アジア諸国との安定した関係、そして絢爛たる文化が輝きを増していた時代でした。例えば、有名な京都の「金閣寺」は義満によって建てられました。「金閣寺」は北山文化を代表するもので、その特色は伝統的な公家文化と新たに興った武家文化の融合、そして中国からもたらされた禅の影響にあります。そのほか水墨画・茶道・華道・枯山水・能や狂言など、今日よく知られている日本の独特な伝統芸能と文化は、室町時代に始まっています。佐伯教授は飯尾宗祇の「筑紫道記」に載っている文を引用し、15世紀の博多が、日本と明朝、朝鮮、琉球の関係を安定させ、貿易が発展する基礎を作り、中世における日本の主な国際貿易港の一つとして、都市の発展と繁栄を導いたことを説明しました。日明貿易の特徴としては、その形式として室町

幕府が明朝の皇帝によって「日本国王」として冊封され、朝貢貿易を行ったことが挙げられます。明は、それを倭寇と区別するために貿易許可証として「勘合符」を日本に発行しました。双方の貿易は、これによって確認された正式な遣明船に限られていました。これを「勘合貿易」といいます。

佐伯教授は、15世紀の博多商人の研究は国内の歴史的資料が散在して博多に残らなかったことから限界があり、博多商人の歴史的資料の多くが海外に散らばって研究が困難になったと指摘しています。最近のアーカイブのデジタル化とオンライン検索の開放、それに加え博多遺跡から発掘された考古学資料によって、体系的な研究が行われてきました。博多の貿易商人の中でも、謝國明（博多綱首）、神屋宗湛・嶋井宗室等は、当地で広く知られた人物です。しかしながら、全く記録に残っていない商人もたくさんいます。佐伯教授は、歴史研究の重要な役割は歴史資料からこれらの人々を提示することであると考えていて、本講義では特別に教授が海外から集めた貴重な歴史資料を紹介し、博多商人の様々な側面について説明しています。

佐伯教授は、以下の五人の人物の事例を挙げています。

(1) 室町時代の筑紫商人（博多商人）肥富。「善隣国宝記」の記録によると、「応永の初め、筑紫の商客肥富、大明より帰り、両国通信の利を陳ぶ。是において大將軍源朝臣義満、すなわち肥富を以て使者と為し、始めて信書を通じ、方物を献ず。」とあります。肥富が足利義満に出向き、明朝貿易の利益を説き、これが遣明船を成功させる契機となったのです。

(2) 宗金とその一族。佐伯教授は、「朝王朝実録（李朝実録）によると、宋金とその子孫は、日本国王の使いとして朝鮮に行き、宋金とその一族が主に朝鮮と取引し、明や琉球と取引を進め、広く活躍した」と紹介しました。

(3) 道安。この商人は地図史と外交関係史で注目されました。特に、申叔舟『海東諸國紀』に含まれる琉球地図は、端宗元年(1453年)に道安が朝鮮政府に献上した「博多・薩摩・琉球地図」に基づいています。このことは地図史の分野ではよく知られています。対外関係史の中で、道安はかつて琉球王の使者として朝鮮に入り、朝鮮政府から優遇され、有利な交易条件を得ました。1457年、道安は漂流民を朝鮮政府に護送したことから、護軍の地位を与えられました。これによって、道安は朝鮮、博多、琉球の交易路において重要な役割を果たしました。

(4) 藤氏一族。その中で藤氏の母親は朝鮮貿易で活発な活動をした、数少ない女性の貿易商人です。

(5) 奥堂氏。日明貿易の中葉期に活動した大商人。今日、博多には「奥堂」という地名が残っていて、これは現在の博多区御供所町（おくしょちょう）の近くにあります。

その後、佐伯教授は15世紀の博多と東アジア諸国交流と都市の発展の関係に

ついて説明しました。このころ、多くの外交使節団が日本に行きました。そして、それらのほとんどは日本の王（室町将軍）に送られた使者でしたが、彼らのほとんどは博多に滞在し、博多の都市の発展を推進しました。

また、博多遺跡群の発掘調査により、中世都市の形態がより明確になりました。特に、多くの貿易陶磁器（中国、朝鮮、東南アジアで製造された陶磁器）が出土しました。これは貿易の発展の具体的な様相を示しています。博多商人の貿易による経済と対外関係の着実な発展は、博多は都市の繁栄をもたらし、商人は団結し始めました。16世紀には、大商人の「合議制」によって管理される自治都市が形成されました。現代の博多では、櫛田神社を中心に、毎年7月1日から7月15日に開催される「祇園山笠」の伝統的な祭りが行われます。これは中世の自治都市の伝統を起源としています。

今回、佐伯教授の講演で、学生たちは近代都市博多（福岡市）と東アジアの交流の歴史を把握することができました。同時に、それはまた学生が現代都市における「新旧」、「技術と伝統」が並存することの意義についても考えることになりました。

（執筆者：黄美恵、日本語科助教授、日本語訳：武石信一、日本語科助手）